

## 日本文学研究会

平成二十九年二月八日

日本近代文学における芭蕉の受容 — 太宰治の〈軽み〉 —

教授 檜田 良枝

日本近代文学における芭蕉の受容は様々な分野に見られるが、今回は太宰治の〈軽み〉の理念形成における芭蕉の位相を考察した。太宰は高校時代から俳句に親しみ、大学時代に熱中した連句は、小説方法を模索していた太宰に多大な影響を与えた。初期の短篇「葉」や中期の「富嶽百景」における連句の歌仙方式や付合という方法の受容からはじまり、俳句の「単一表現」に自らの求める芸術観をみいだそうとし、俳句における名詞の効果への称讃や、芭蕉への言及が多くなる。右大臣実朝像の造型に託された〈軽み〉の理念は、後期の「パンドラの匣」では芭蕉のかるみと同一であることが明示され、そこに新しい芸術の進む道を重ねている。また芭蕉のかるみ論は「斜陽」にも援用され、「人間失格」にも俳句が挿入されていることなど、太宰文学の中核に芭蕉が深く関わっている。

ある日の彰子の怒り

教授 久下 裕利

『四条宮下野集』によると天喜四（一〇五〇）年四月三十日皇后宮寛子春秋歌合において選歌された宮の女房である下野の歌三首のうち二首が、女院彰子の圧力で女院方の女房である伊勢大輔の歌に差し替えられるという事件が起きた。下野にとって晴儀歌合に三首も選歌されたのであるから名誉なことになるはずだったが、一転して悲憤慷慨な件となってしまい、歌合においても下野の右方は敗けてしまった。

これが事実だとすれば、温情な彰子の人生史にとっても唯一の汚点となるような権力の行使であったことになるが、頼通の実娘寛子への後見が、後冷泉天皇を蔑ろにするような局面として捉えれば、既に女院である彰子の立ち位置が、摂関家の藤原氏というよりも皇族圏の人として皇権を支える立場にあって、これも単なる嫌がらせの域にとどまる事件ではなく、弟頼通の後宮政策への不信感の現れとして極めて政治的な事件であることを述べた。